

京丹後移住促進プロジェクト ～新たな地方移住の仕組みづくり～

1 目的・概要

本科目は、京都府の北部に位置する京丹後市丹後町間人（たいざ）地区で、学生と地域の人々が協力して移住の仕組みづくりに取り組むプロジェクトです。

コロナ禍以降「密」を避ける動きが加速する中、テレワーク（在宅勤務）の推進や、企業の地方への移転が後押しとなって、自然豊かな地方への移住は現実的で魅力的な選択肢になりつつあります。

間人は、日本海に面したすり鉢状の地形をもつ人口2,000人程の地区で、ユネスコから世界ジオパークの認定を受けるほどの豊かな景観を特徴とし、冬には地域ブランドの「間人ガニ」を目当てに多くの観光客が訪れます。

その一方で、人口減少率と高齢化率は京丹後市内でも特に顕著であり、地域コミュニティの維持が喫緊の課題となっています。

そこで本プロジェクトでは、「移住促進」の観点から間人地区の地域課題の解決の一助となることを目的とした活動を展開しました。

昨年度の成果を受け継ぎ、今年度は「内からも外からも愛されるまちを構想し、その実現のための一歩を踏み出す」ことを新たにゴールに設定し、活動を行いました。課題を明確にしていく中で、「人と人とのつながり」をより活性化させる必要があると考えました。ここでは、内は間人に住む住民、外は未来の移住者になる可能性のある人物を指します。実際に住民にヒアリングを行い、ワークショップで意見を出し合いながら、理想の間人のまちはどんなまちか、それに対する地域の現状と、問題点、課題、ありたい姿を達成するための解決策等、課題設定を行いながら活動しました。



Annual Schedule

2022年4・5月	チームビルディング、間人視察、プロジェクトの目標決定
6月	地域住民へのヒアリング
7月	k-plus solutions 田中様による講演（ワークショップの構成へのアドバイス）、ワークショップにて地域住民と共に交流イベントを企画、日商社 喜田様による講演（イベント開催に関して）、春学期成果報告会
8・9月	他地域事例調査、ウォークラリー準備・コース下見
10月	ウォークラリー準備・開催
11月	活動方針の見直し、ロードマップ作成、潜在的移住者へのヒアリング
12月	ワークショップにて地域住民と共にロードマップを作成
2023年 1月	秋学期成果報告会

2 成果達成度

前述のように、私たちは「内からも外からも愛されるまちを構想し、その実現のための一歩を踏み出す」という目標を掲げて活動してきました。1年間の活動を通じて、この目標は概ね達成できたと考えています。

春学期

春学期の成果は大きく2つあります。1つ目は、地域の問題を発見し、課題を定義することができたことです。4月に行った視察や6月のヒアリングを通じて、気軽な関係、新しい関係が生まれにくいことを問題と考え、さまざまな人と繋がる場所を作るといった課題を解決するために交流イベントを行うことを決めました。交流イベントを行うことで、間人内のさまざまな人と関わることができ、それによって新しい人を受け入れやすい雰囲気を広まると考えました。また、地域のことをより深く知ることができるイベントにすることで、間人の魅力再発見にもつながると考えました。



さらに、間人でワークショップを開催し、住民と共に交流イベントを企画することで、住民の主体性の向上を達成することもできました。これが2つ目の成果です。ワークショップ後に行ったアンケートでは、95%の参加者が「次回もこのようなイベントに参加したい」と回答しました。

秋学期

秋学期の成果は3つあり、1つ目は、春学期に住民と共に企画した交流イベントを通じて、新たな人とのつながりを作り、魅力を再発見してもらうという目的を達成することができたことに加え、まちづくり団体・市民局長・区長と協働してイベントを成功させることができたことです。事前準備では地域の方々とオンラインで会議を重ね、事前訪問の際には、共にウォークラリーのコースを検討することができました。当日は、会場設営やチェックポイントでの各スポットの説明を担当していただきました。



2つ目の成果は、幅広い年齢層の住民に、私たちの活動に関わってもらうことができたことです。多様な層にアプローチする理由としては、より多くの人の意見を反映させたまちづくりが可能になることと、多くの住民にまちづくりを自分事として捉えてもらうことができることが挙げられます。

3つ目の成果は、移住者と住民双方の視点からの理想の間人を構想することができたことです。「未来の移住者目線から住みやすいまち」・「住民が理想とする10年後のありたい姿」を考え、共通項を探し出すことで、既に間人での暮らしに慣れた地域住民にとってのみ住みやすいまちではなく、既存の住民に



加えて移住者も住みやすいまちを考えることができました。

しかし、内からも外からも愛されるまちの構想は、複数の案が出ている状態であり、今後の具体的な活動の指針が明確に定まっているわけではないため、構想の確定は来年度以降の活動に引き継ぎたいと思います。

3 プロジェクトを通じて

今年度は、昨年度の活動で築かれた地域のまちづくりの土台を生かして、活動の輪をさらに広げることができた一年間だったと思います。その中で感じた協働することの難しさや地域の方との関係構築の大切さについて述べようと思います。

まず、協働することの難しさについてです。このプロジェクトの成功には、学生同士の協働、学生と地域の協働が不可欠ですが、イベント準備などにあたって他者と一つのを創り上げることの難しさを強く感じました。学生同士の協働にお



いては、一部の学生に負担が集中してしまうことがあったため、こまめに進捗状況を共有し、常に学生全員が関われるように工夫してきました。地域と学生との協働においては、何度も議論を重ねてきた学生には伝わっても、初めて説明を受ける地域の方にはうまく伝わらないことがあり、初めて聞く人にもわかりやすいような言葉選びや説明の仕方に苦戦しました。

次に、地域の方との関係構築の大切さです。4月の初めての人間訪問では、地域の方とどのように話をしたらよいか分からず、戸惑う学生が多かったのですが、地域の方とワークショップやウォークラリーを開催し、学生が地域のイベントに参加する過程で、良好な関係を築くことができました。昨年度のプロジェクトで作上げられたまちづくりの土台に加えて、学生と地域の信頼関係が築けたからこそ、ワークショップで地域の方と活発に話し合ったり、ウォークラリーのような大規模なイベントを成功させることができたと思います。



編集後記

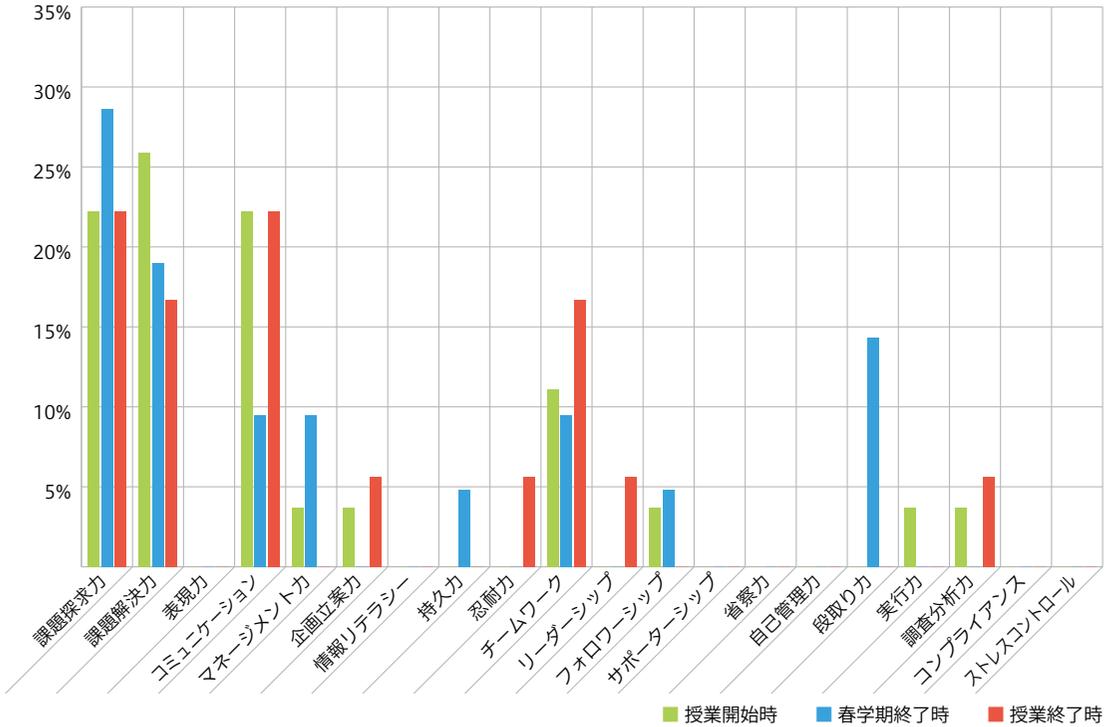
ワークショップ設計やイベントの企画・運営など今まで経験がないことばかりで、想像していた以上にハードな一年間でした。活動の中で、迷ったり悩んだりすることもありましたが、そういった出来事も含めて、とてもいい経験になったと感じています。一年間の活動を滞りなく進めることができたのは、私たちの活動に協力してくださった京丹後市の皆様、いつも適切な助言をくださった先生方、SAの田中さん、イベント実施等でサポートしてくださった事務局の職員さん等の多大なるご支援のおかげです。学生一同、心より御礼申し上げます。

プロジェクトメンバー

出川 葉奈子(文2) 濱 菜月(文2) 田口 愛望(社会2) 太田 彩奈(商4) 大野 聖梨(政策2)
外村 宗太(政策2) 佐藤 李帆(グローバル地域文化2) 長谷川 舞矢(国際教育インスティテュート3)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

Q1. チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んでください。



Q2. プロジェクト活動を通じて実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んでください。

